

[研究ノート]

幼児期への「生命（いのち）の安全教育」の指導に向けて

*味田 徳子

Toward the Teaching of “Life Safety Education” to Young Children

Noriko Mita

キーワード： 安全教育、性教育、幼児期、発達

Key Words: Safety education, sex education, early childhood, development

要約： 近年、「性被害」「性暴力」という言葉をよく耳にするようになった。これまでは声をあげることが難しく、またその対象の多くが声をあげることができない「子ども」たちであったため、政府は、令和2（2020）年より文部科学省・内閣府を主体とし「生命（いのち）の安全教育」に取り組み始めた。その教育対象は幼児～大学生・一般までである。先行研究では、保育者養成校の学生および「子ども」たちへも「生命（いのち）の安全教育」の指導が必要であること、また性教育を含めた授業内容を学びたがっていることなどが示唆された。そこで本研究では、幼児期の教育方法について、発達段階における性の特徴・対応について文献調査を行い、教育のあり方を検討する基礎資料を作成した。また性教育は必要と理解されながらも、その教育を行う保育者養成校での教科が不明瞭であり、歴史的経緯や説明内容により、教育（保育）者自身が、性教育に対して消極的であることがわかった。

はじめに

近年、「性被害」「性暴力」という言葉をよく耳にするようになった。これらは個人の尊厳を重んじない悪質な犯罪であるが「性」に関する内容であり、問題が表面化されにくい。特に被害にあった者の精神的ダメージやその後の事情聴取を考え、訴えることを諦めてしまう、あるいは訴えまでの期間が長くなったため証拠となるものが消滅してしまうケースもあり、事件としての立証が難しい。またその被害者の多くが「児童」であり、幼少期から問題をかかえ、誰にも相談できず、苦痛のまま生活していかなければならない現状である。子どもであるがゆえに、その事実が犯罪と理解できるまでに時間がかかることもあり、加害者が身近な人の場合、周囲に相談しづらいものであり、「性被害」や「性暴力」は、社会的に問題視されることが難しいものである。

内閣府男女共同参画局が、警察庁の令和 4（2022）年「刑法犯に関する統計資料」¹⁾の強制性交等罪件数を参考にして作成した資料²⁾によると、その対象の 4 割以上が 10 代以下の子どもであり、0～12 歳では 2018 年に比べ 2022 年は 1.4 倍以上になっており増加傾向であるという。しかし前述したように、子どもは自ら被害の声を上げにくい。このような状況から政府は、令和 3（2021）年から、文部科学省、内閣府、厚生労働省が主体となって、子どもたちの命を守るということを目的とした「生命（いのち）の安全教育」の取り組みを始めた。さらに令和 5（2023）年より、本格的に全国の学校での教育が始まった。子どもへの「性犯罪」「性暴力」は断じて許されるものではなく、「子供の性被害防止プラン（児童の性的搾取等に係る対策の基本方針）2022」（令和 4 年 5 月 20 日犯罪対策閣僚会議決定）³⁾に基づき、子どもへの性被害の防止に係る取組を総合的に推進している。

「生命（いのち）の安全教育」は、「性教育」と同じものと理解されがちであるが、本来は子どもの人権を守ることを目的としたもので「性被害者」「性加害者」にならないようにすることである。「学校における性教育の考え方」として、小野ら（2009）は、幼稚園の性教育目標として「自分の誕生」「男女の違いの認識」「生命の尊さ」「男女のいたわり合い」が記載されていると述べている⁴⁾。このようにならだの正しい知識や情報を知るための「性教育」は、「自分の身を守ること」につながるものと考えられるため、

「生命（いのち）の安全教育」を行う上で大切なポイントとなる。またその指導は、幼少期から必要であると考えるが、幼稚園教育要領⁵⁾や保育所保育指針⁶⁾では保育者養成校のカリキュラムにおいて、性教育を扱っている内容は特にない。あえて言うならば、幼稚園教育要領の領域「健康」に、自分の体に関心を持ち、大切にしようとする気持ちが育つようにすることと記載されている。そこからさらに、自分だけではなく、他の人の体を大切にすることが育つように指導していく必要性が述べられている。

一般的に性教育に対する認識は多様であり、保育者が性教育の教え方を学習していないため、幼児に正しく性教育を行うことは難しい。筆者（2022）の先行研究⁷⁾において、

「性教育」を保育者養成校の学生も学びたがっているという結果が得られた。また若井ら (2017) は、親子が一緒に性教育を学ぶことができる『幼児期から親子で始める性教育プログラム』(全3回)を実施している。本プログラムは、家庭において親による性教育が継続できる親子関係を築くことをねらいとしている。このように家庭内においても性教育の必要性を感じ、教育が展開されている。そこでは、幼児期から『親子で始める性教育』に参加する半数以上の親が、子どもの社会的情緒的発達を促す学習内容を期待していることが報告されている⁸⁾。

幼児期は自我が芽生え自己概念の発達する時期にあり、周囲のおとなや子どもの行動を観察し、自己の行動変容や習得を繰り返している時期である。このような社会的発達段階にある子どもは、周囲への興味・関心が高まり、保育者に次々と質問してくる。保育者は、性に関する内容である場合、即座に自信をもって返答することができず、子どもにどのように対応して良いのか戸惑うことがあるのではないだろうか。また保育施設においても、性教育の必要性は理解されており、その教育を専門としている講師（例えば助産師など）に依頼していることが多い。しかし日々子どもたちに接している保育者こそ、その教育者としての役割があるものとする。保育者は子どもたちから性についての質問を受ける機会もあり、また性器いじりなどの行動を見かけることもある。このような場合、どのように対応すれば良いのか、なぜそのような行動が出るのかなどの知識を学ぶことにより、即座に適切な対応ができ「自分のからだの大切さ」を知るのではないだろうか。そのためには、保育者養成校での性の学びの機会があることにより、苦手意識を持つことなく、自然な形で対応できるものとする。

1. 目的

学校における安全教育の目標は、日常生活全般における安全確保のために必要な事項を実践的に理解し、自他の生命尊重を基盤として、生涯を通じて安全な生活を送る基礎を培うとともに、進んで安全で安心な社会づくりに参加し貢献できるような資質や能力を養うことにある⁹⁾。筆者(2022)の先行研究⁷⁾では、保育者養成校の学生として教育を受ける側の意識調査、保育者養成校の学生への講義の教授方法の検討を行った。それらの研究において、学生自身も「生命(いのち)の安全教育」が重要であると理解できたとともに、「子ども」たちへもその指導が必要であること、また性教育も含めた授業内容を学びたがっていることなどが示唆された。

そこで本研究では、幼児期の「生命(いのち)の安全教育」についての授業を行うために、まずは日本の性教育の歴史・現状、海外の性教育事情について文献調査を行い、様々な視点から「性教育」について考え、課題点を見出し、今後の授業方法につなげていくことを目的とする。

2. 研究方法

2021 年から始まった生命（いのち）の安全教育についての研究は、研究授業として小学校～高校までの実施報告等はあるものの、まだ多くは発表されてはいない。特に幼児期については、文部科学省から動画や資料は配信されているが、その実施報告や文献は少なく、「からだの守りかた」といった園児向けの絵本や「いのちの授業」など、助産師による性教育の指導内容についての調査報告書が見受けられる。そこで文献や政府からの情報を収集し、その内容から保育者養成校の授業に必要な情報をピックアップし、授業内容について検討していく。

3. 結果と考察

3-1. 「生命（いのち）の安全教育」に関する現状

3-1-1. 歴史・日本における現状（表 1）

日本の社会では、性に関する内容は長い間タブー視されてきた。その理由として、戦後の性教育活動が挙げられる。反橋（2021）によれば「戦後すぐは性感染症罹患率の高さが突出していたが、その後 1950 年代後半から減少した」と述べている¹⁰⁾。終戦後の日本は混乱の中、生活の糧のための売春などが横行し性感染症罹患者が急激に増加したものと考えられる。このような性行動の変化は、青少年を刺激し、その背景から我が国の性教育は、青少年の不良化の抑止や男女の不純異性交友を防止するために、昭和 21 年「青少年不良防止について」、昭和 22 年「純潔教育の実施について」の通達から始まった経緯がある。この「純潔教育」¹¹⁾は日本人の国民性の象徴であり、特に当時、女性に求められていた「女性像」でもあり、性感染症を予防する方法でもあった。その後 1960 年代になると、テレビやラジオ等の普及により、性に関する情報があふれ、性解放の風潮が出てきた。さらに子どもの身体発育が加速したことにより、身体と精神がアンバランスとなった結果、少年犯罪に占める性犯罪の割合が増加したと言われている。しかし我が国の戦後の性教育の主な内容は、男女間の道徳と秩序を守るといった「純潔教育」であったため、その後も性教育には消極的であり、初潮を迎える小学校高学年の女子に月経教育を行う内容に留まっていた。しかし 1970 年代に入り、性解放の影響により性感染症や若者の妊娠増加などが社会問題として取り上げられ、性教育に対する考え方が変化し始めたのである。ところが、現場で行われていた性教育が問題となり、また性教育の歩みを止めてしまった。それが、七生養護学校事件¹²⁾である。日本では、学習指導要領からその教育内容が逸脱しているという理由から、数年前まで(2003～2013 年及び 2018 年)東京都議会議員(政治家)や東京都教育委員会(教育行政)による性教育への介入が行われ、性教育の環境作りが著しく阻害されてきた。

河東田（2024）は、「学校性教育に政治家や教育行政介入したことで、『性的共生』に向かって歩み続けている多くの人たちの努力を踏みにじり、『性的共生』から大きく遠ざ

けられる結果となってしまった」と述べている¹³⁾。このような政府の動きに対して、日本の学校は性教育に対して消極的となり、世界に比べると遅れたものになっているものと考えられるが、今日では性教育が心と体の健康教育の中に取り入れられるなど、学校教育以外に助産師、保健師らの専門職に「性教育」の実施を求められるようになってきており、少し海外の水準に近づこうとしている。

表1 東京すくすく 子どもの日々を支える -東京新聞-¹⁴⁾より

◇性教育の歩み	
終戦後	国が治安対策に、結婚まで性交しないなどの「純潔教育」を主導
1970 年代	米国発の女性運動の波及とともに性教育も活発化
1980 年代	エイズの社会問題化、性教育が喫緊の課題に
1992 年	「性教育元年」。学習指導要領改訂で小学 5 年理科で「生命の誕生」を学ぶように。小学校の保健の 5・6 年生用教科書が初めて登場
1998 年	学習指導要領改訂。小学 5 年理科で「人の受精に至る過程」を、中学 1 年保健体育で「妊娠の経過」を「取り扱わない」とする「はどめ規定」が初めて記載
2003 年	東京都七生養護学校（現七生特別支援学校）での知的障害のある子らへの性教育が都議会で問題に。都は教材を回収し、教員らを処分
2004 年	都教委が「性教育の手引」を改訂、性教育を抑制する方針を示す
2005 年	自民党内に「過激な性教育・ジェンダーフリー教育実態調査プロジェクトチーム」が発足、「過激な」性教育を批判。全国の自治体で手引の改訂も進み、性教育は大きく萎縮へ
2013 年	七生養護学校への介入事件で、最高裁でも教員らが勝訴
2018 年	東京都足立区立中学校での性教育が都議会で批判される
2020 年	国が「性犯罪・性暴力対策の強化の方針」で教育・啓発の強化を明記
2022 年	衆院文科委員会で永岡桂子文科相（当時）が「はどめ規定」について「撤回は考えていない」と答弁
2023 年	「生命の安全教育」が全国の学校でスタート

3-2. 「生命（いのち）の安全教育」

3-2-1. 「生命（いのち）の安全教育」とは何か

「生命（いのち）の安全教育」とは、千葉県教育委員会は「生命の尊さを学び、性暴力の根底にある誤った認識や行動、また、性暴力が及ぼす影響などを正しく理解した上で、生命を大切に考える考えや、自分や相手、一人一人を尊重する態度等を発達段階に応じて身に付けることを目指すものである。」と述べている¹⁵⁾。

現在政府は、強制的性交罪の認知件数の増加（図 1）により、令和 2（2020）年より文部科学省・内閣府を主体とし発足、令和 3（2021）年 4 月に文部科学省から教材・手引きが発表され「生命（いのち）の安全教育」に取り組み始め、令和 5（2023）年より全国の学校を対象とし、幼児期から大学や一般、特別支援教育まで実施するようになった。

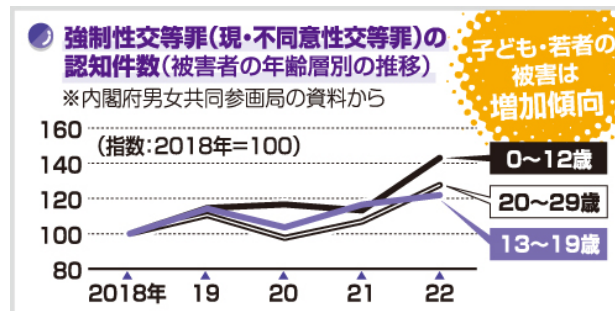


図1 シル マナブ ニュースがわかる A to Z 時代遅れの「性教育」(12 面)¹⁶⁾ より

3-3. 幼児期の教育

3-3-1. 幼児期とは、どのような時期か

幼児期は、学習や人間形成の基礎を作り、基本的な信頼感を育む大切な時期である。子どもは産まれてから、様々な刺激を受けながら脳や神経系、運動機能などが発達し、言語を学び、身体能力をつけていく。そのためこの時期の教育は、その後の発達に大きな影響を与える。そして、さまざまな刺激を受けると生涯にわたる「生きる力」の基礎を作ることができると言われてしている。また幼児期は子どもの好奇心が旺盛なため、思考力や判断力、表現力の基礎を養うことができる。さらに幼児教育とは、小学校に就学前の子どもに対して行われる教育のことであり、家庭や地域社会における教育・体験も幼児教育に含まれるため、社会性や健康な身体を育てることができる。

幼児教育では、子どもの好奇心や興味を尊重し、思考力やコミュニケーション力を高めていくことが重要であり、子どもたちが社会で主体的に活躍できる力の育成が求められているといえる。しかし、家庭や地域の教育力の低下が課題である今、家庭だけで子ども教育を施すのは難しいこともある。そこで幼稚園や保育園などの施設において、文部科学省から出されている今後の幼児教育の方向性(表2)を参考とした教育及び指導力が求められているのである¹⁷⁾。

表2 今後の幼児教育の方向性

《幼児教育に大切なこと》

- 安全な環境を整備
- 創造性を促進
- 思う存分身体を動かせる環境を作る
- 言葉の発達を促す環境を整備
- 個々人の発達段階をよく把握し、合わせる
- コミュニケーションの場を増やし、社会性の発達を促す

3-3-2. 幼児期における性教育

幼児期における性に関する教育の方法は、慎重に検討されるべき内容であろう。幼稚園教育要領の領域「健康」において、自分の体に関心をもち、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養うとある。これは、遊びが展開され、体を動かす心地よさを味わうようにすることから、自分の体を大切にしようとする気持ちをもつ働きかけについて述べている。そして保育所保育指針の保育の内容「人間関係」においては、他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とのかかわる力を養うとあり、友達の体を気遣ったり、大切にしたりする気持ちをもつことにつながるよう指導する必要性が述べられており、社会生活 における望ましい習慣や態度を身に付けることがねらいとなっている。幼児期は、具体的な性教育の指導内容というより、人間関係についての理解やコミュニケーション能力、自分の体や相手を想いやる心を育てていくことが重要であろう。そしてこれも一つの「生命（いのち）の安全教育」である。

幼児は様々なことに興味関心をもって質問をしてくる時期であり、性に関する質問への対応に戸惑う保育者が多くいるであろう。それが、性教育に困難さを感じ、性教育に対して距離を置くことにつながるとも考えられる。黒沼（2012）は「幼児期は社会性を身に付けていく大切な時期であるため、保育者側が幼児への言葉かけ等を意識して関わることが重要である」と述べている¹⁸⁾。そこで浅野・野坂（2022）「性をはぐくむ親子の対話」¹⁹⁾を参考に、子どもたちの発達とともに考えられる性や体の特徴、それに対しての保育者の関与または必要と思われる知識を発達段階ごとに、保育者が簡単に理解し対応できることを目的とした表を作成した（表3）。

表3 「性をはぐくむ親子の対話」¹⁹⁾より改変 筆者作成

	性に関与する発達の特徴	性的変化に対する知識・関与
生 後 ま も な い 頃	親のホルモン (オキシトシン)	母（子宮収縮、射乳…） 子（不安を鎮める、快…） ➡ 母子相互作用
	模倣	顔の表情を自動的に模倣➡ 生存のために備える行動
	おっぱい	空腹感を満たす、人肌に触れることで、あたたかい、やわらかい、気持ちを落ちつかせる効果。
	ペニスの勃起	おむつ交換時に見る、胎児のころからある生理的現象。
	生命に関わるサイン (啼泣、ぐずり…)	空腹や温度、痛みなど不快な場合に知らせる。生存がおびやかされる場面で、安全のためにとる。 アタッチメント行動(泣く、ぐずるなど)に対して保育者がタイミングよく、ニーズを満たす(不快をとり除く) ↓ 基本的信頼感 (アタッチメント)= 愛着形成 ※自分を大切だと思える感覚や他者への信頼感は、将来パートナーとの親密な関係性の基盤となる。お互いを大事にし合うことのつながりでもある。

0 ～ 1 歳	探索行動	手指が動かせるように、手に触れたものを口を持っていく、口唇がからだで最も敏感な時期に、口唇でここちよさを感じる(指しゃぶりなど)、手足を口を持っていく、指をしゃぶる、おすわりで、目についたペニスをひっぱったりする。
	共感	模倣により、大人の口や舌の動かし方、声の調子、顔の表情などの反応をなぞることで、すこしずつ相手の意図や気持ちがわかるようになっていく。
	運動面の発達	他者に抱きついたりして安心感を得ようとする。おとなと触れ合う安心感がある。
	自分のからだに触れる	お座りができるようになると、視界が広がる → 目についたものを触ろうとする。抱っこしてくれた人の鼻、髪、唇などを触ったり、引っ張ったりする。
	触ったり、口につけた り、抱きついたりする	母親の乳房を触ったり、口に指を入れたりするのは、探索行動の一つ。人と接することによる心地良さ、安心感がある。
	知っている人と知らない 人	6ヶ月ぐらいから、「人見知り」がはじまる 普段お世話をしてくれる養育者を安全な人とみなし、安全基地の認識がある。保育園など、多くの人に保育されている場合、「人見知り」がないこともある。
	育てにくい	病気や障害がある場合、過敏な赤ちゃんの場合など、専門的知識を持っている人に相談する。 ※生まれつきの性差は、判断が難しい。
2 ～ 4 歳	自己調整	言葉を使い始めることで、対人関係が大きく変化する。人に要求を伝えたり、自分のニーズを優先させるやり取りが見られる。→ 主体的となり「ありがとう」などの自分の気持ちが伝えられ、自分を励まして痛みに耐えるなどの力をつけていく。
	社会性	あらゆる質問を大人に向けてくる時期で、知るよこびだけでなく、大人とのやり取りを楽しむ。運動能力も高まり、行動範囲が広がるにつれて自ら探索していくため、ケガや事故の危険性が高まる。 そのため、安全のルールや身を守る方法を学ぶのに最適な時期である。
	排泄コントロール	膀胱や腸の発達に伴い、排泄の間隔が長くなる。トイレトレーニング:子どもが自分のからだの感覚に気づき、排泄後の心地良さを味わうことで定着する。オムツの卒業→自信。自分のからだは自分のものという、からだの境界線が自覚されるようになり、体のしくみに興味を持つ。
	性器や排泄物の名前を 言う	性器や排泄物を身近に感じる時期。言葉をたくさん覚える時期でもあるため、「おしり」「うんち」などの言葉を言って笑ったり、面白がったりする。自然にみられなくなるので、禁止しなくてもよいが、食事や公共の場で、大声を出したり、排泄物の話をするのがふさわしくないというマナーを教える。また別の楽しい話題に変えて、会話を楽しめる体験を重ねる。性器に関心を向けている時期なので、体の名前を教えたり、トイレ、着替えの方法を練習する。
	性器を見せようとする	男女のからだの違いに興味を持つ。子ども同士の見せ合いっこは、自然な好奇心によるものなので、「いやらしい」など否定的にとらえない。
	赤ちゃんへの興味	赤ちゃんへ興味が出てくる時期であり、その赤ちゃんはどこからくるの?という質問がある。これは、探索行動の一つであるため、子どもの年齢や関心に合わせて答えていく。 (例:3歳児の場合、お父さんとお母さんが可愛い赤ちゃんが欲しいと思ったから)
	赤ちゃん返り(退行)	関心を引こう、赤ちゃんの真似をするなどの一時的な行為。否定するのではなく、子どもの気持ちに沿って対応し、年齢相応の行動をほめると安心し自信をもって振る舞えるようになる。
2 ～ 4 歳	自分の意思を強める(イヤイヤ期)	自分でやりたがる「主体性」の芽生えの時期。世話をする上で、手間や時間がかかるが、「できた」という体験を重ねて自信をつけて自信をつけていく。

5 ～ 6 歳	空想的な思考	ファンタジーと現実の境目があいまいで、大好きなキャラクターが自分を救ってくれると安心したり、ヒーローのように戦えると思ったりする。これは、子どもの心の支えとなる場合がある。 子ども同士で「ごっこ遊び」で役割交代をしながら、コミュニケーションスキルを磨いていく。自分の性別とは異なるジェンダーを試す子もいる。
	気持ち良さが一番	裸や人前で着替えることへの羞恥心がない時期。人前で裸になったり性器を触っていた場合は、静かに注意する。笑ったり叱責することにより、余計に続ける可能性もある。
	遊び(おままごと、ごっこ)	「ごっこ遊び」に、実生活やテレビなどで見聞きしたことにより、性的な行動が含まれることがある。性行動のルールやお互いのからだを大切にしながら遊ぶ方法を教える良い機会であり、子どもがルールを理解できているか、見守ることが大切。
	自分の性器を触る	さみしい時、不安な時、退屈な時に性器をいじり、その変化をおもしろがったりする。また心地良さを求めて触っていたり、家具や床に押し付けていたりすることもある。この場合、「一人きりのときだけ」という性行動のルールや「清潔な手で」という衛生面について子どもに伝える。
	性教育	性器やからだに興味を持っているこの時期は、最適である。からだお仕組み、自分や相手のからだを守る気持ちを大切にすることを対話をしながら子どもがわかるように具体的に伝えること。
	子どもが誰かにキスした	日本では挨拶としてのキスの習慣がない。性行動のルールを子どもと確認し、キスしても良い相手を具体的に伝え、ルールに沿って行動が取れるようにサポートする。 ※おとながジェンダー期待を押しつけるのではなく、子どもの個性や強みを見つけて、伸ばしていき、多様なセクシュアリティの子どもが安全暮らせることが大切である。

3-3-3. 性教育を行う保育者側のポイント

幼児期の「生命（いのち）の安全教育」においては、「水着で隠れる部分」は自分だけの大切なところ、相手の大切なところを、見たり、触ったりしてはいけない、いやな触られ方をした場合の対応等について、資料（図2）が作成されている²⁰⁾。そして幼児期の性教育では、「からだを守る」ということについて伝えることが大切である。



図2 文部科学省資料 幼児用

幼児期の性教育を行う際の保育者側のポイントとして、保育者自身が、性教育を肯定的に捉え、正しい身体のしくみを理解し、性に関することを偏見や自己の価値観で伝えないことが大切である。まずは「自分の体を大切にすることから教える。そして子どもたちには、いのちに関係するところであり、人に見せたり、触らせたりしてはいけないということを伝える。次に性差別につながるような声かけに注意し、一方的な発言とならないように気をつける。また伝え方は、年齢や発達、理解度に合わせて変えていく必要があるが、できるだけ子どもたちが自分で考え、さらに発言を促すことにより理解度が増す。あからさまに嫌な表情や発言をしないように気

を付ける。わからないことや、伝えにくいことは「どう思う?」、「なんで気になったの」と一緒に考えていくことがとても重要である。

3-4. 世界の性教育

3-4-1. スウェーデンの学校での性教育の実態²¹⁾

スウェーデンでは、1956 年から性教育が義務化されている。義務教育を行う学校は基礎学校と呼ばれ、7 歳からの 9 年間である。3 年ごとに、低学年レベル、中学年レベル、高学年レベルと区分けされている。1977 年の「(性と) 対人関係に関する学習指導要領」(以下「1977 性教育学習指導要領」)は、9 年間の基礎学校に適用されていた。「性関係をもたずして生ずる親密な人間関係は、お互いの心を豊かにする機会でもある」という文言で始まり、四つの目標が掲げられている。そしてこの目標を達成するために、各学年でどのような方法を採用し、どのような内容が盛り込まれるべきかの手順が記されている。

〈性教育の目標〉

- ①責任と思いやりがもて、仲間の世話ができるような人間関係がもてるように、そして、相手とともに幸せのよりどころとなる性を経験できるように、解剖学・生理学・心理学・倫理学・社会的関係に関する知識を獲得できるようになること。
- ②奨励されるべき基本的で一般的な価値を受け入れることができるように、また相反する価値をもつ立場の人を受け入れることができるように、性的な関係や他の対人関係に関する様々な主義・イデオロギー・価値についての知識を獲得できるようになること。
- ③性とは、人間の生活の統合された一部であること。そして、個人の発達・社会関係、社会構造と密接に関連しているということを理解できるようになること。
- ④性の複雑な性質を理解し、対人関係において個人の立場を受け入れること教育の義務化とその発展。

以上のようにスウェーデンの場合、7 歳から 9 年間の義務教育を通して性教育が行われ、自分のみならず相手の立場も理解し、論理的かつ科学的知識の獲得ができるように組み立てられている。

3-4-2. デンマークの学校性教育の実態

デンマークは、「性の先進国」というイメージを持たれることが多いようである。確かにデンマークは、1973 年の早い段階で堕胎の自由が法律で認められたり、1989 年に同性婚が認められたりと他国に比べると性に対して自由度が高く先進的である。デンマークでは、一応何を学ぶべきかを大枠を示す「共通目標」というものは政府により示されているが、教科書は日本のような国による教科書検定はなく、どの教科書を使うかは学校や先生の裁量に任される部分が多い。性教育の内容や質は学校の力の入れようや教師の指導力

により開きが出た。現在のデンマークの性教育の主流は、自分の体をここから先は触ってほしくない、自分のセクシャリティやプライバシーにここからは立ち入ってほしくないといった境界線を示す術について子どもたちに分かりやすく書かれている本が使用されている。これは、日本の「生命（いのち）の安全教育」に通じるものである。また、親子で性について話す際の言葉の選択について示されており、日常の中で自然に繰り返し何度も親子で話し合うことがテーマとなっており、家庭で性教育を行う際のヒントにもなっている。また、1970 年基礎学校法により、基礎学校（6 歳から 10 年間の義務教育。日本の小・中学校に当たる）における性教育が必修化したが、高校以降の性教育の義務化の必要性について議論されている。

3-4-3. オランダの学校性教育の実態

オランダでは、21 歳まで避妊薬など避妊手段は健康保険の対象になっており、ホームドクターで処方されるピルは無料で入手できる。また緊急避妊薬のアフターピルもドラッグストアで購入できる。このような情報から、日本に比べると発展的でオープンな国なのだろうと想像できる。また性教育についても小学校の早い時期から実施されていて、実技項目も盛り込まれている。その背景には移民が多く、性の多様性への対応も行なっていかなければならないことにある。このように早期から性教育を行うことにより、子どもたちは性に関して興味深くなり、日本でよく言われている「寝た子を起こす」のではないだろうかと考えられがちであるが、実際はその逆で、自分の体に興味を持ちコントロールすることを学ぶ。また、リヒテルズ（2020）は「オランダの 10 代の性交体験率は、意外と低い」と述べている²²⁾。これは、世界保健機関（WHO）が 5 年ごとに行なっているヨーロッパ諸国および北アメリカ、ロシアなどの 11～15 歳までを対象とした健康行動についての総合的な調査（2016）において、オランダの 15 歳児の性交体験率が 40 カ国中、36 位であったことに基づいている。また避妊具の使用については、40 カ国中 11 位、ピルの使用については 3 位につけているという。リヒテルズは、このデータから一概に早期の性教育を推奨し、決定的な結論を出すことは危険とも言っているが、オランダの子どもたちは、避妊の知識が豊かで、自分のからだを大切に守っているということと言えるであろう。

3-5. インクルーシブ教育の視点から

3-5-1. 障がい児の性教育

障がい児の性教育については、七生養護学校事件でも取り上げられているように、物理的な機能障害、重度の精神障害などがない場合、成人期の身体は健常者と同じである。むしろ無知なままでの性的行為による被害や悲しみなどの影響が大きいものと考えられる。そして、その関係者も不安や戸惑いを感じているのではないだろうか。医療技術の発展やケアの充実によって、障がい者の平均寿命も延びてきており、青年期を通して老年期を迎

える時代になっている。そのため、今後ますます障がい者の性教育のニーズは高まり、保育者はそれに対応する知識や方法について研鑽していかなければならない。

3-5-2. 包括的性教育

浅井 (2023) は、包括的性教育を「①乳幼児期から青年期、成人期までを視野において、②性的発達のすべての局面に対応できる能力の形成をめざし、③日常生活で生じるさまざまな場面として人間関係に賢明な選択と対応ができるための学びであり、④さまざまな共生が実現できるちからをはぐくむことをめざす」と述べている²³⁾。つまり、幼少期より「性」と共生するちからを獲得していくことをめざしているということである。先述したように「性教育」をめぐる歴史では、純潔強制教育は「宗教」や特定のイデオロギーをバックボーンとした教え込みであることが多く、民族・国・地域の「文化」として受け継がれてきた。また性の恐怖教育抑制的性教育は、「寝た子を起こす」論がベースにあり、結局は性的な自己決定をすることを認めたら問題行動が増えると考え、できるだけ性行動に向かわせないことを求めた。そして性教育政策によって、いわゆる“はどめ規定”による必要な学びを制限している実状があった。

しかし現在、包括的性教育が世界の国々で活用され、発展をしている現状がある。その理論的基盤となっているのがユネスコ編「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」²⁴⁾であり、包括的性教育の中心的な推進力となっている。

おわりに

厚生労働省 令和 5 年 (2023) 人口動態統計²⁵⁾によると、合計特殊出生率は 1.20 であり、過去最低値となった。これは、さまざまな少子化対策がとられているにも関わらず、驚くべき数字である。根底には、2020 年に拡がった「コロナ感染」の影響が否めない。出産とは、母親の産む力に任され、孤独であり、かなりの覚悟がいる。その中での隔離、立ち会い・入院面会の制限、育児への不安など、様々な困難の中での出産を強いられる。命の重さに差はないが、このような状況下で生まれて来た子どもたちも含めて、まだ大人の養護が必要な子どもたちを、周りの大人が守っていくことが大切である。

「生命 (いのち) 安全教育」は人権を守る教育でもある。保育者自身もそのことを自覚し、より一層子育て支援をしていくことが望まれる。

性教育を受ける側の発達段階、また教える側の職種や立場によって、性教育のあり方は様々であり、求められているものも変わってくる。しかし、その教育によって大切な命をどう守るか、自己の肯定から自己決定能力を育てていくためには、学校教育と、成長発達段階に合わせた健康教育を積み上げていく必要がある。特に幼少期からの教育は、その後も継続的に行うことにより一層の効果があらわれると考えられる。普段から、子どもの性

についての疑問や気づきに保育者が対応できることで、性の自己決定力が促されると考える。

また、保育者養成校における「生命（いのち）の安全」授業および性教育のカリキュラムは、確立されていない。これまで、どの教科で行うか不透明であったが、性教育はからだのしくみや特性を知り、からだを大切にする目的がある。そこで、保育所保育指針や幼稚園教育要領にある「健康」「健康(指導法)」へつなげていくことが妥当ではないかと考えられる。さらに「生命（いのち）の安全教育」の目的である自分も被害者や加害者にならないということを考えると、周りとの人間関係が大切で「人間関係」「人間関係（指導法）」と連動しているのではないだろうか。

国連が定めた「国際セクシャリティー教育ガイダンス」²⁴⁾では、5歳からの教育が進められている。ガイダンスは、学習目標が発達年齢などで論理的に段階づけされており、学習者ができるようになることが到達目標として構成されている。知識の理解や継続、判断やコミュニケーションなどが確立してくる面から、5歳という年齢で設定されているのであろう。しかし、もう少し早い年齢であってもおしっこやウンチが出てすっきりする

「快」という気持ちやオムツが濡れている「不快」な感情は理解することができる。つまり欲求を満たされた時や嫌な感情の場合は5歳未満であっても表現できる。そうすると乳児保育の分野でも取り扱う内容であり、保育者としてどのような対象であっても、子どもたちが自ら表現できるように丁寧に対応していく必要がある。拡大解釈するのであれば、排泄後スッキリした場合、それに対して「気持ちいいね」という声をかけることや母親から直接授乳する場合、「おっぱいは大切なもの」と言うように伝えていくことも、性教育の第一歩であると考えられる。

幼児期は人間の基礎をつくる時期、いろいろなことを吸収できる時期、また興味のある時期でもあるので、保育者が面倒くさがったり、後まわしにしたりしてはいけない。適切な対応のためにも性への疑問、質問についての対応力を備えておく必要がある。また授業のポイントとしては性教育についての理解を深めておく、知見を拡げておく、わかりやすい教育方法を学ぶ必要性があるであろう。

〈引用・参考文献〉

- 1) 警察庁「令和4年 刑法犯に関する統計資料」p30-31
<https://www.npa.go.jp/toukei/seianki/R04/r4keihouhantoukeisiryou.pdf>
 最終閲覧日 2025年2月9日
- 2) 内閣府男女参画局「共同参画」2023年8月号,p10
<https://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2023/202308/pdf/202308.pdf>
 最終閲覧日 2025年2月9日
- 3) 内閣府『子供の性被害防止プラン（児童の性的搾取等に係る対策の基本方針）2022』

<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/hanzai/kettei/220520/honbun.pdf>

最終閲覧日 2025 年 2 月 9 日

- 4) 小野敏子・野田洋子・荒木こずえ・増田美恵子 (2009) 『幼児期における性教育に関する幼稚園教諭の認識』川崎市立看護短期大学紀要 14 (1), pp 55-61

- 5) 幼稚園教育要領 学習指導要領「生きる力」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/nerai.htm

最終閲覧日 2024 年 10 月 30 日

- 6) 保育所保育指針

https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00010450&dataType=0&pageNo=1

最終閲覧日 2024 年 10 月 30 日

- 7) 味田徳子 (2022) 「生命 (いのち) の安全教育の取組みに向けて-保育学生における『性教育』の意識調査」秋草学園短期大学紀要, 第 39 号

- 8) 若井和子・秦久美子・渋谷洋子・藤井清美 (2017) 『幼児期から親子で始める性教育が親子関係に与える効果』川崎医療福祉学会誌, Vol. 27 No. 1, pp75-84

- 9) 厚生労働省 『「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育』

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/05/15/1416681_04.pdf 最終閲覧日 2024 年 10 月 28 日

- 1 0) 反橋一憲 (2021) 『若者の性の問題化の構造-保健体育教科書における性感染症の記述を例に』ジェンダー研究, 第 24 号, pp155-157

- 1 1) 田代美江子 (2000) 『戦後改革期における「純潔教育」』日本女子大学 教育学研究室紀要〈教育とジェンダー〉第 3 号, pp26-29

- 1 2) 浅井春夫、日暮かをる (2023) 『なぜ学校で性教育ができなくなったのか-七生養護学校事件と今-』包括的性教育推進法の制定をめざすネットワーク編, あけび書房, p136

- 1 3) 河東田博 (2024) 「誰もが性的人間として生きる」現代書館, pp79-94, p99

- 1 4) 東京すくすく 子どもの日々を支える 東京新聞デジタル

<https://sukusuku.tokyo-np.co.jp/education/77640/>

最終閲覧日 2025 年 2 月 9 日

- 1 5) 千葉県教育委員会 『生命 (いのち) の安全教育』

<https://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/jisei/inochinoanzenkyouiku/gakusyuichiran.html> 最終閲覧日 2024 年 10 月 28 日

- 1 6) 東京新聞 シル マナブ ニュースがわかる A to Z 時代遅れの「性教育」

2023 年 11 月 6 日版, P12

- 1 7) 文部科学省 『子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の方向性』

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/04102701/002.htm

最終閲覧日 2024 年 10 月 30 日

- 1 8) 黒沼茉未 (2012) 『発達段階における性教育についての一考察』小池学園研究
紀要, No 10, p75-88
- 1 9) 浅野恭子、野坂祐子 (2022) 「性をはぐくむ親子の対話：この子がおとなになる
までに」日本評論社
- 2 0) 文部科学省 生命 (いのち) の安全教育 幼児期
https://www.mext.go.jp/a_menu/danjo/anzen/index2.html#infancy 最終閲覧日
2024 年 10 月 30 日
- 2 1) 橋本紀子 (2018) 『教科書にみる世界の性教育』かもがわ出版
- 2 2) リヒテルズ直子 (2020) 『0 歳から始まるオランダの性教育』日本評論社, pp19-
20
- 2 3) 浅井春夫 (2020) 『包括的性教育-人権、性の多様性、ジェンダー平等を柱に
-』大月書店, p3-4
- 2 4) 浅井春夫、谷村久美子、村末勇介、渡邊安衣子 (2023) 『国際セクシュアリティ
教育ガイダンス』活用ガイド, 明石書店
- 2 5) 厚生労働省 令和 5 年 (2023) 人口動態統計 月報年計 (概数) の概況
[https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai23/dl/gaikyouR5.p
df](https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai23/dl/gaikyouR5.pdf) 最終閲覧日 2025 年 2 月 9 日

*味田 徳子 秋草学園短期大学 地域保育学科 専任講師